

# 触覚による彫刻鑑賞法と「触れてみる彫刻材」の可能性に関する考察と実践

Considerations of Possibilities for Appreciating Sculptures by Touching Various Materials

武末裕子\*

TAKESUE Hiroko

**要約：**本論は、より豊かな彫刻の鑑賞法をおこなうことを目的とした「触覚による彫刻鑑賞法」に関わり、彫刻作品への触覚による鑑賞だけでなく、素材に焦点を当てた「彫刻材」をあわせて制作し鑑賞の補助として利用することを通して、彫刻を多方面から鑑賞する鑑賞法の可能性について考察し、実践し探究するものである。

実践として行った展覧会では、異素材による彫刻展示や触覚による形態把握による鑑賞の提案にとどまらず、「彫刻材」を利用した鑑賞法をあわせて提示することで、素材に着目した鑑賞視点が喚起され、素材が与えるイメージや要素が鑑賞の手がかりとなっていることが明らかとなった。

**キーワード：**彫刻鑑賞、彫刻素材、触覚、造形要素、美術館教育普及展示

## I はじめに

「感性を豊かにする美術教育」における身体感覚は「視覚」の果たす役割が大きいと長年思われてきた。しかし近年、生涯教育と多角的な鑑賞教育の高まりから「視覚」以外の身体感覚の研究が深まりつつある。そしてまた、美術教育の指導内容では「表現」と「鑑賞」分野を相互に関連づけた展開や、美術館を含む公共施設との連携が盛んである点も注目すべき流れと言えるだろう。本論は最終的に「触覚」をたよりとした美術教育の視点や展開を提示するために素材・造形の彫刻的視点から「触覚」に着目した教材の制作と実践を行ったものである。

美術教育の活動の「表現」及び「鑑賞」の活動の基となる「感じる心」、それは身体感覚の様々な情報から複合的に形成される。

これまで、筆者は木、金属、石、ガラス、土等の異素材を組み合わせた造形活動の発表を2000年から行っており、2002年からは美術館を会場として「触覚」に着目した教育普及に携わってきた。2009年からは美術館学芸員の視点から盲学校生徒の彫刻鑑賞会やシニア世代を対象とした連続造形講座「掌の美」（「触覚」をキーワードに様々な素材での表現活動と手で彫刻を触れて観る鑑賞活動を組み合わせた講座）を開催している<sup>1</sup>。展覧会の企画の際には子どもが展示を更に楽しめることを目的とした鑑賞教材の作成に携わるとともに、鑑賞の際の「触覚」の果たす役割について子ども達の実際の姿から学ぶ機会を持つことができた。

そうした中で、鑑賞者にとってさまざまな素材を視覚だけではなく「触覚」を通して認識し、それぞれが持つ特性（テクスチャー、温度、重さ等）を体感的に感じ取ることによって、手で観る鑑賞活動もより豊かなものとなっていく様子が見られた。それらの実践を踏まえ、本論の実践では地元大学や作家、団体の協力を得てより多様な素材の特徴を生かした教材提示をおこなうこととした。

なお、本論の素材収集に入るにあたり、事前に山梨県立美術館の『手でみるミレー』を学生と見

\* 芸術文化教育講座

学し、その変遷を教育普及学芸員に伺う機会を得ている。これは視覚的にミレーの「絵画作品」を見ることができなくても、触ることにより鑑賞することができるという1986年から続く全国的に見ても先駆的な試みである。また山梨県立盲学校では、「触覚」による鑑賞に関わる1960年代の先進的な教育実践をお聞きすることができた<sup>2</sup>。本論はそのような土壌のある山梨県での提案を試みたものである。

## II 本論に関する国内での研究動向と先行事例

### 1. 本論に関する国内での研究動向

触覚に着目した表現・鑑賞の発展は盲学校あるいは個人の熱意ある実践によるところが大きい。神戸市立盲学校の福来四郎の粘土による実践（1950年～）<sup>3</sup>、千葉盲学校の西村陽平（現日本女子大家政学部児童学科教授）による実践<sup>4</sup>、作品に触れる美術館「ギャラリー・TOM」（1984年～）<sup>5</sup>等、数多くの優れた実践が見られる。

さらに近年の鑑賞教育の高まりから、多くの美術館において「ハンズ・オン・コーナー」として「触覚」を通して鑑賞できる作品を常設設置の取り組みが随所でみられるようになった。

そのような中で、本論の実践にあたる展示の参考とした実践例を2例挙げたい。どちらも触覚による鑑賞教育普及教材として欠かすことができない事例である。

### 2. 触覚を手がかりとした教育普及展示事例

#### (1) 「手でみるミレー」山梨県立美術館

山梨県立美術館は、開館間もない時期よりノーマライゼーションの理念に沿って、障がいのある来館者の鑑賞活動の支援に取り組んでいる。障がいのある鑑賞者への対応は、主に美術館の専門ボランティアが担当し個に応じた解説をおこなっている。また、こうした活動が始まった背景には、特別支援学校での教職経験を持つ学芸職員が在籍していたことも一つのきっかけとなっていると思われる<sup>6</sup>。

現行の「手でみるミレー」は美術館の常設展示室の入り口に常設コーナーとして配置され、担当のボランティアスタッフが常時対応し、文字による解説と点字による解説が用意されている。形態・素材はカラー図版に凹凸のある樹脂が上から重ねられているものである。（図1）

来館用・もしくは持ち出し用としての現行タイプの図版は《種まく人》と《落ち穂拾い、夏》の2作品に対応したものがそれぞれ2種類、それぞれに情報量が少ないタイプと多いタイプとがあり、視覚経験の度合いによって合計4種類を鑑賞することができる。



図1

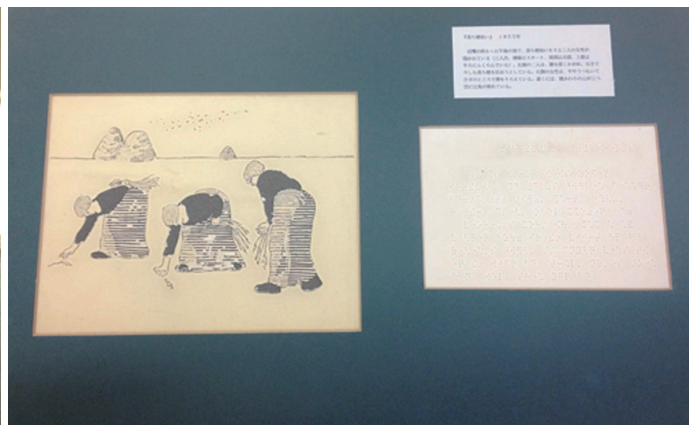


図2

また、「手でみるミレー」の変遷をたどると、初代は紙のエンボス加工であり（画面上の線を整理し柔らかい凹凸を指でたどっていくタイプ）、文字と点字部分も分離している。上記2作品の他にも紹介作品数は多く、情報量は同等の6枚の絵画紹介がなされている（図2）。

## （2）「世界をさわる」国立民俗学博物館

2009年に民俗学博物館の学芸員である広瀬浩二郎学芸員が中心研究者の一人となり立ち上がった科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究」、その研究をかたちにしたものが同館本館にあるインフォメーション・ゾーン「探究ひろば『世界をさわる』」（図3）である<sup>7</sup>。

展示資料はよりよく理解するために①じっくりさわる（イヌイットの彫刻などをゆっくりさわって資料の形や手ざわりを味わう）、②見てさわる（資料を手にとりキャプションや解説を読みながら、全体の形や細部の構造などを視覚と触覚によってしっかり確かめる）③見ないでさわる（ブラックボックスに手を入れて、視覚に頼らずに触覚だけで資料の形や細部の様子を把握する）、といった3つのコーナーに分けられており、鑑賞者の個性や理解度に応じて鑑賞を進めることができる（図4）。

広瀬学芸員自身が途中失明を経験していることもあり、本来の博物館的な資料展示にはとどまらない、触覚鑑賞法への切り口が多様で魅力的な提示がなされている。

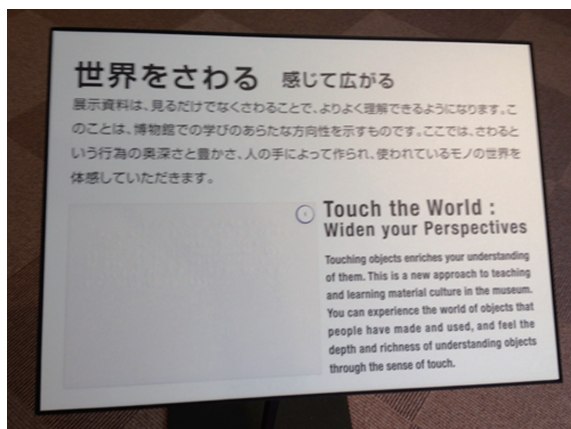


図3



図4

## 3. 今後予想される研究動向と教育現場へのつながり

以上のような公共施設での研究実践がおこなわれる中、X線解析や3Dプリンターなどの技術進歩から、形の複製については全国的に普及教材の長足な進歩が見られる。特に絵画作品のレリーフなどによる触覚鑑賞法は賛否両論あげられるが、鑑賞や普及の切り口としてまた新たに注目を集めている分野といえることができる。

しかし、彫刻等の立体作品においては簡易なレプリカや普及教材では本物の素材感を伝えづらい。現在、気軽に扱える樹脂素材の教材が多く見られるが、本物に出会うために存在する美術館・博物館ではより本物に近い素材での複製品の探究が今後も求められる。

また、冒頭で述べたように鑑賞教育の高まりからも教育現場を含むより幅広い個性に応じた鑑賞法と普及教材が今後も求められるであろう。

### Ⅲ 触覚による造形と鑑賞に関する実践研究

#### 1. 大学での授業実践

触覚を用いる鑑賞法の実践や「触れてみる彫刻材」(教材)の制作・提示に入る前に、大学での授業実践についてふれておきたい。

大学での実践のメリットは学生が自身の発想に基づいて課題を設定し、制作にあたり、フィールドワークや対象を設定した調査結果をフィードバックする事によってより良い気づきが得られることにある。

大学での専門授業「立体造形」の授業では、立体を理解する造形要素の一つとして「形態」「素材」「質感」に着目した課題を2点課している。一つ目の基礎課題は課題「身体感覚がいきる造形」。もう一つは課題「素材の特性を楽しむことができる本」である。

課題「身体感覚がいきる造形」では「手にこちよい形」と題し、手の中の形(土を握った形)を粘土で把握した後に、視覚的にも触覚的にもこちよい形態を模索する。平成25年度はテラコッタ粘土での制作にとどまったが(図5)、木彫による課題も他大学で実施したことがあり(図6)、素材の違いを体感するのも有効であることが明らかになってきた。



図5

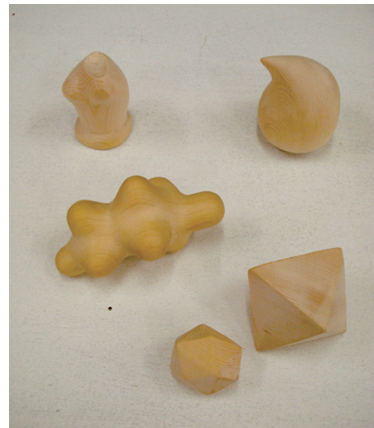


図6

また、課題「素材の特性を楽しむことができる本」では、ブルーノ・ムナーリ(1907-1998年)の《本に出会う前の本》の着想を参考に、各自の発想を生かして規定のサイズで素材の異なる本の形をした作品に取り組んだ。<sup>8</sup>ここでは素材の特性による質感や触感を楽しむことができるように工夫された作品が多く見られた。(図7)は陶によるゲーム感覚で楽しめる本である。8枚全て違う釉薬で焼成されており、指で陶板をスライドさせながら組み合わせを楽しみ、指で釉薬の触感を楽しむ。(図8)はビニール素材でできており、中に硬さの違う色糊と大きさの違うジェル状の粒が封入されている。各作品とも対象年齢を仮に設定して制作にあたっているが、この作品は粒をつかむ感触を楽しむことに視点を絞り、未就学児も楽しめるように設定されていた。(図9)は糸や布を自作の枠に織り込んだ作品で質感を楽しんだり紐を結んだり解いたりして楽しむことができる作品である。遊びの要素を取り入れながらも、素材の質感に着目した作品が多く見られた。

作品は全て制作者である学生自身が想定した年齢層の方に実際に鑑賞してもらい、感想を収集してフィードバックして授業を進めた。また、各自の振り返りでは、(図7)の陶の作品を作った学生からは「思ったよりもきれいな陶板ができて、既成の陶板よりも温かみがある作品になった。陶板を作るための粘土をこねるところから木の枠を作るところまで、うまくいかないことばかりだった。鑑賞者の感想にもあったように、本当に自然を相手にしながら作品を作っているようだった。しかし、そのおかげで自然の温かみのようなものを感じ取ることができる作品に仕上がったと思う。」(図9)の糸を使った学生からは「完成作を見せたところ、『毛糸の組み合わせから物語を想像でき



図7



図8



図9

る』など思いもよらない意見を頂くことができた。客観的な視点を得ることによる作品の再確認ができ、有意義だった。視覚や触覚を重視して制作したが、視覚的イメージと毛糸の性質が一致したことで、軟らかさと温かさを感じられる毛糸の性質に合わせた本を作ることができた。全体を通して、自分で想像したものを作り人に見せるということは、大きな経験になった。」という感想があがった。

以上のことから、素材に着目した造形課題に取り組み、客観的な意見を収集することで、より素材の特性に迫りながら制作にあたることができているといえる。

## 2. 彫刻展示での実践

これまで筆者は「木」「金属」「石」「ガラス」「土」等の異素材を組み合わせた造形活動の発表を継続しておこない、前述のように美術館や学校教育の現場で「触覚」に着目した教育普及に携わってきた。そして、本学に赴任した平成24年度からは「素材の特徴を生かした教材及び題材開発研究」、「触覚による彫刻鑑賞法の提案と『手でみる彫刻展』による実践研究」に取り組んでいる。<sup>9</sup>

以下は実際に制作した作品に触れながら鑑賞する鑑賞法提案と彫刻材（教材）展示をおこなった実践である。

### (1). 東京都美術館 国画会彫刻部トークイン・ワークショップ

国画会 では東京都美術館を会場として国画会本展・彫刻部秋季展の普及活動の一環としておこなわれ、筆者は発表作家として継続して参加してきた。

2012年には「第35回彫刻部秋季展～かたちと触覚～」(会期：10月29日～11月6日、会場：東京都美術館)の中で視覚特別支援学校招待児童とのワークショップ(筑波大学附属視覚特別支援学校児童の彫刻鑑賞と石彫道具体験)(図10)とトークイン『現代彫刻とのふれあい』(対話や作品にふれるなどの体験を通じた鑑賞会)が実施された。



図10

ワークショップでは、弱視の児童とペアを組み彫刻を鑑賞して会場を巡った。抽象彫刻のイメージを対話で伝えるのは難しいが、触覚を通して素材の質感から受ける情報は多岐にわたるようで、どの参加者も熱心に鑑賞している様子が見られた。特に「風」という抽象的なテーマのダイナミックな石彫抽象作品の前では、まず始めに全体の形態の把握、後に細部への質感の確認がとても入念になされており、一つの石にも部分によって表情の違う積層が見られることにこちらも気づかされた。

筆者の作品も鑑賞して巡ったが、児童が触れるには繊細な箇所が多く、素材も磁土と銀でできて

おり、鑑賞者も作品が人物像で、硬質な作品であることが分ると緊張感をもって鑑賞している様子が見られた。児童の発達段階や身体の大きさに合わせて、より安全に鑑賞出来る工夫をさらに要することが具体的に分かってきた。

## (2). 山梨大学・山梨県立大学連携事業『手でみる彫刻展』素材展示

「素材の特徴を生かした教材及び題材開発研究」、「触覚による彫刻鑑賞法の提案と『手でみる彫刻展』による実践研究」の発表の場として、古屋祥子山梨県立大学准教授と県内若手彫刻家の芝田典子氏、山梨県立図書館の協力により山梨大学・山梨県立大学連携事業『手でみる彫刻展』（会期：2013年9月30日～10月5日 会場：山梨県立図書館）を開催した。

会期中は視覚に障がいのある方や視覚特別支援学校も含む450人程の来場があった。展覧会の詳細については継続予定の事業であるので今後報告書としてまとめていく予定であるが、ここでは「触れてみる彫刻材」と触覚による鑑賞法についてのみ実践報告として記していきたい。

この展示では素材の違う彫刻6作品を展示し、他2点が資料展示であった。そのうちの1点が「触れてみる彫刻材」である。彫刻材は同形5点で構成され、石（大理石）・ブロンズ・土（テラコッタ）・木（楠）・石膏であった。他にガラスの資料を加え制作過程や作業道具を出品者協力のもと画像でも紹介した。（大理石から型を取る様子（図11）、ブロンズの鑄造の過程で鑄原形を石膏型に埋没させている様子（図12）、テラコッタ粘土型込みの様子（図13）等、全15分ほどの写真画像で構成。）

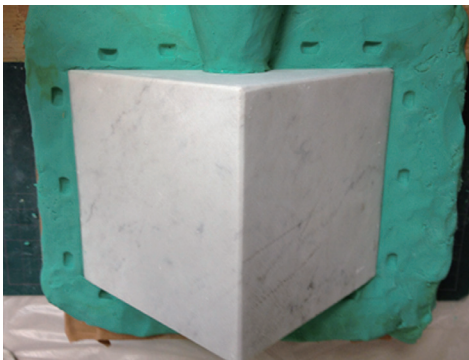


図11

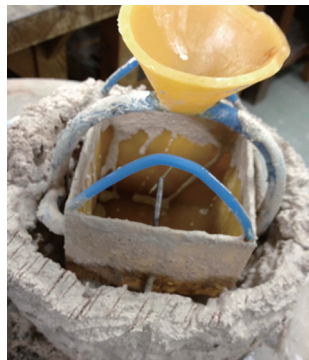


図12



図13

5つの素材展示の机には説明文と点字解説をつけ、また、素材を展示の導入部に配したことにより、質感や重さ構造の違いを触れて鑑賞するので、視覚に障がいのある方は素材の特性を予め記憶することでその後の鑑賞がよりスムーズに情報量としても豊かな物になり、見えている鑑賞者には素材の特性に着目して鑑賞する提案となっていた（図14）。来場者アンケート（回答者68名）では素材の提示について右のような意見が寄せられた。

### 素材の資料展示についてのアンケート結果

- ・触れられることは特に楽しかった、実際にゆっくり触らせてもらえて、とても嬉しかった
- ・安全で壊れない資料で、こちらも気を使わず楽しめた
- ・作品に触れる機会が少ないのでいいと思った、いろんな素材があって面白かった
- ・芸術作品には触れられないと思っていたので実際に触ることができ楽しかった
- ・解説シート、キャプションにも点字があり工夫があつて良かった
- ・人の五感の中の触覚に着目し、テーマとした展覧会は新鮮だった
- ・作品理解の上でも触れられることはとても大事だと思う
- ・通常の展覧会作品ではタブーなのでとてもユニークだった
- ・創作してみたい気持ちになった
- ・触れることに慣れていないので、びくびくしながら触れた
- ・見るだけでは分からない、触れてみて、初めて分かる温度、湿度、重量など
- ・触れる機会がなかなか無いものばかりだったので非常に興味深かった
- ・彫刻の素材について改めて感じる事ができた、素材への理解が進み良いと思う
- ・普段ふれることがないのでとても嬉しかった、見るだけでは伝わらないぬくもりのようなものを感じられた、素材のあたたかさ、冷たさなどが感じられて面白かった



図14

アンケートにあるように芸術品は触れてはいけないのが常識と考え、緊張した面持ちで触れる姿、素材の違いを次々と発見して楽しむ姿等、様々な様子がみられた。

- た
- ・大体同じサイズの大きさのブロックで異なる素材を触り比べるのは楽しい、面白い
- ・重さ（本物の作品は持ち上げることができないため）、匂い、色感で楽しめる
- ・資料展示があったことで、見るだけでは分からない触感の違いなども感覚的に理解することができ、良かった
- ・実際に作者から直接話を聞くことができ勉強になった、作品の背景を知ることができ、また違った視点から作品を鑑賞出来た
- ・映像で制作過程や道具をみられて、作品が出来上がるまでの作家さんの汗を感じることができた、もっとみてみたい
- ・自然素材について興味を喚起させるような働きかけがよかった
- ・ツルツルしている物と、ザラザラしている物の差が大きくて面白かった（小学生）
- ・人によって触れ方が異なる、入場者の鑑賞の仕方をみているのも勉強になった
- ・芸術作品には触れてはいけないというのが常識なのに、この展覧会では自由に触れて良いのでちょっとびっくりした
- ・石と石膏は色が似ているのに、触り心地が全く違うので新鮮だった

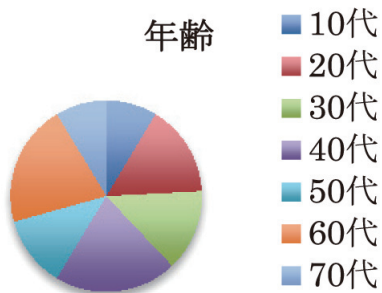


表1

鑑賞を終えて興味があった素材

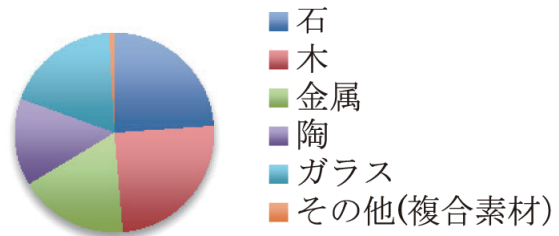


表2



図15

また、今回の鑑賞者は年齢にあまり偏りが無く、アンケートの限りでは、(表1)のように分かれていた。また、様々な素材を鑑賞していただいた後の「展示を見終えて興味があった素材について」の項目では興味があった素材が見事に分かれ、鑑賞者各々に新しい発見を提示することができていたことが分かった。

また、視覚に障がいがある人が多く来場する中、視覚ばかりでなく聴覚にも重複障がいのある来館者の鑑賞に立ち会う機会もあり、情報を第一訳者（口話→手話）と第二訳者（手話→指文字）を通すことで、伝えることの難しさも体感した（図15）。

しかし、言語より直接触れて感じる情報の方が印象深く感じる鑑賞者も多かったようで、こちらが口頭で情報を伝えるより先に、素材や形態から受ける直感的な感想を述べていただく時も随所にみられた。また、写真の著者の作品《こもこも～よろこびとかなしみ～》<sup>11</sup>は異素材複合によるものであるため、今回の研究がより

鑑賞の手がかりになっているとも考えられる。

美術における対話による鑑賞法は昨今教育現場でも頻繁に取り上げられている項目であるが、対話はいくまで情報であり、鑑賞者のイメージを引き出すのは他者の投げかけより先に鑑賞者の能動的な作品への働きかけが基本であると筆者は考える。そうした中でも、触覚による鑑賞法はより深く多角的に作品を楽しむ上でとても重要な要素であることが、この展示と教材、来館者の姿によって明らかになった。

## IV おわりに

以上の事例と実践から彫刻鑑賞においては、触覚による鑑賞法や彫刻材（教材）の提示によって、形態把握による鑑賞の提案にとどまらず、素材に着目した鑑賞視点が喚起され、素材が与えるイメージや要素が鑑賞の手がかりとなっていることが明らかとなった。事例・実践を報告し、それぞれを考察するにとどまったが、展覧会は今後も継続しておこなうため、今回は述べる事ができなかった視覚経験による立体把握や触覚経験による視覚への補足認知、また技法的な事では触れてみる半立体として一般的なレリーフ表現についても今後の実践とあわせて論究していきたい。

この研究の発端は前職の学芸職での学校鑑賞会、特に盲学校児童の鑑賞の際により彫刻を楽しんでもらいたいと願い実践を始めたものであるが、今後もより多くの個性に届くよう、個人の表現にとどまる事無く実践的な研究を進めていきたいと考えている。

### 註

1. 武末裕子「美術館における生涯学習のための連続講座の展開」『大学美術教育学会誌』no.44, pp.287-294, 2012年
2. 山梨県立盲学校では毎年夏休みに資料展示を行い、1960年代からの貴重な映像資料や教材を公開している。
3. 福来四郎『みたことないもん作られへん』, 講談社, 1969年  
1950年から神戸市立盲学校で始めた粘土の彫塑指導、触覚の造形としてとらえたところに特徴がある。
4. 西村陽平『手で見るかたち』, 白水社, 1995年
5. 東京都渋谷区松濤に目の不自由な人が彫刻に触って、鑑賞できる場所として1984年に開館。現・近代の彫刻や立体作品を紹介し、夏休み期間は全国の盲学校生徒の作品を展示している。ギャラリーTOMの創設者の一人である村山亜土は、独創的な美術家である村山知義を父に生まれた。
6. 「ミレーの美術館と視覚障害者の取り組み」『誰にも優しい博物館づくり事業 バリアフリー』, 財団法人 日本博物館協会, p.38, 2006年
7. 広瀬浩二郎・小山修三「世界をさわる手法を求めて」『月刊 みんぱく 2012年7月号』, 国立民俗学博物館, pp.2-9, 2012年
8. デザイナーであり造形ワークショップの創始者ともいわれるブルーノ・ムナーリの文字の無い手のひらサイズの12冊の素材の違う本。裏も表もなく、本という概念を最大限に簡素化し、見た目・触り心地・重さ・素材など、子どもが全ての感覚で、本はいいなと、記憶するように作られている。(制作, ダネーゼ社, ミラノ, 1979年)
9. 平成24・25年度は「素材の特徴を生かした教材及び題材開発研究」が学内戦略公募プロジェクト



ト・スタートアップとして、平成 25・26 年度「触覚による彫刻鑑賞法の提案と『手でみる彫刻展』による実践研究」は学内戦略公募プロジェクト・基盤研究としておこなっている。

10. 国画会は伝統的な文展の審査のありかたに不満・疑問を持った京都在住の日本画家によって、“西洋美術と東洋美術の融合と新しい日本画の創造”を目指し、大正 7 年 (1918 年) に「国画創作協会」として結成された。絵画部に版画部・彫刻部・工芸部・写真部を加え、5 部による美術団体として、昭和 20 年 (1945 年) を除き、毎年春期に東京都立美術館にて公募展を開催。平成 19 年 (2007 年) より、国立新美術館に会場を移す。著者が属す公募団体。
11. 作品「こもこも～喜びと悲しみをかわるがわるに～」(第 87 回国展, 国立新美術館 (東京), 2013 年, 陶・ガラス・木・鉄・ブロンズによる造形作品) をより安全に作りかえた作品。